

東京医療保健大学大学院 医療保健学研究科 医療保健学専攻
博士課程 要旨

在宅で暮らす要介護後期高齢者と多職種支援者による「高齢者の生活上の困難に対処する体験」の共有を促す支援モデルの開発

東京医療保健大学大学院
医療保健学研究科 医療保健学専攻
博士課程
領 域 名 看護学
学籍番号 HD117002
氏 名 清田 明美

背景 (Background or Introduction)

高齢者を社会で支える介護保険制度により、要介護後期高齢者の生活は多職種の支援によって支えられるようになった。しかし、高齢者の意向と支援にずれが生じることがあり、それが両者にとっての困難になっていることが報告されている。これは、支援者が高齢者の自律的に生活していく力に気づくことができないことが要因の1つとされる。本研究では、高齢者が生活上の困難に対処すること自体が自分らしい生活を望む高齢者の自律的な生活の営みであると捉え、これを支援者が共有できることが必要であると考えた。

目的 (Objective)

在宅で暮らす要介護後期高齢者の生活上の困難に対処する体験を、高齢者を支援する各職種一人一人が高齢者と共有することにより、自律的な生活を目指す支援モデルを開発する。

方法 (Methods)

要介護後期高齢者の生活上の困難と対処に関する調査をし、その結果と文献をもとに、要介護後期高齢者と多職種支援者それぞれが、高齢者の生活上の困難に対処する体験（以下、「高齢者の体験」）の共有を可能にするための仮支援モデルを作成した。5名の後期高齢者と4職種の支援者グループ（21名）に仮支援モデルを示し、「高齢者の体験」の共有を可能にするための支援モデルに必要な構成要素を検討した。後期高齢者は個別インタビューを、多職種支援者は同職種同士のフォーカス・グループ・インタビューを行い、質的記述的に分析した。両者の結果を統合し、新たな支援モデルの提案について検討した。

結果(Results)

高齢者の体験に関する先行研究をもとに作成した仮支援モデルを通して、支援モデルの構成要素として、後期高齢者からは「高齢者の体験」の共有を促進する要素【支援者の承認によって得られる自分の努力に関する肯定的気づき】【高齢者が主導する必要性を感じる支援者との相互理解への気づき】が、阻害する要素【弱者の立場を感じ、自分への尊重を感じない支援への思い】【支援者の思いが分からない関係性で応じる難しさ】が明らかとなった。多職種支援者からは「高齢者の体験」の共有を促進する要素〔支援者自身の支援のあり方に関する内省や自己点検〕〔社会と関わり生きる者としての困難を抱える高齢者のとらえ方〕〔自律的に対処する存在としての高齢者のとらえ方〕他3つが、阻害する要素〔高齢者の思いや高齢者への関わり方が分からない関係性で支援する難しさ〕〔家族や多職種間での支援の方向性を同じくする難しさ〕が明らかとなった。

結論 (Conclusions)

仮支援モデルの構成要素「生活上の困難」「対処」「すり合わせ」「高齢者の目指す生活」に、新たに「対話」と「体験共有の促進」「体験共有の阻害」の要素を加え、要介護後期高齢者と多職種支援者へのリフレクション機能を持ち、両者の相互理解を促すことを可能にする『要介護後期高齢者と多職種支援者による「高齢者の体験」の共有を促す支援モデル』を提案した。

キーワード (Key Words)

要介護, 後期高齢者, 生活上の困難, 対処, 自律, 相互理解, 多職種, 支援モデル